

令和元年度第1回高梁市総合教育会議 会議録

1. 招 集 令和元年6月24日 午後3時00分
2. 開 会 令和元年6月24日 午後3時00分
3. 閉 会 令和元年6月24日 午後4時50分
4. 会議の場所 高梁市役所 3階大会議室2・3
5. 出席、欠席した構成員の氏名

| 氏 名 | 出欠の別 |
|-----------|------|
| 近 藤 隆 則 | 出 席 |
| 小 田 幸 伸 | 出 席 |
| 川 上 は る 江 | 出 席 |
| 吉 川 昭 | 出 席 |
| 渡 邊 あ り さ | 出 席 |
| 藤 井 祥 生 | 出 席 |

6. 会議に出席した者の職氏名

| 職 名 | 氏 名 | 備 考 |
|---------------------|-----------|-----|
| 政 策 監 | 前 野 洋 行 | |
| 教 育 次 長 | 竹 並 信 二 | |
| 参 与 | 田 村 啓 介 | |
| 秘 書 広 報 課 長 | 川 内 野 徳 夫 | |
| こ ど も 未 来 課 長 補 佐 | 森 本 修 司 | |
| 教 育 総 務 課 長 | 大 福 克 志 | |
| 学 校 教 育 課 長 | 石 原 洋 重 | |
| 社 会 教 育 課 長 | 渡 辺 丈 夫 | |
| ス ポ ー ツ 振 興 課 長 | 藤 井 正 宣 | |
| 文 化 セ ン タ ー 所 長 代 理 | 原 田 貴 子 | |
| 教 育 総 務 課 総 務 係 長 | 村 上 靖 恵 | |

7. 協議題

- (1) 子どもたちが志をもつためのカリキュラムについて
- (2) 特別支援教育について
- (3) 部活動の在り方に関する方針について
- (4) スポーツ推進計画について
- (5) 文化センターの指定管理者制度の導入について

8. 議事の概要

- 1 開会
- 2 あいさつ（市長）

例年に比べると相当遅くなっているが、天気予報ではそろそろ梅雨入りのようである。6月30日には、市の大規模水害対策訓練を実施する。昨年のような災害が起こらないことを願っているが、こればかりは分からない。市民の皆さんにも、自分の身は自分で守るということをお話ししている。復旧事業については、全力で取り組んでいるところであるが、おそらく3～4年はかかるであろう。

復興元年ということで厳しい予算編成となった。教育予算については、前年度と同程度の予算措置をさせていただいているが、新規事業を行うことができない点をご理解いただきたい。そうした中、さまざまな課題もあり、これまでも申し上げてきた「まちづくりは人づくり」という強い視点を持って進めていく。本日の議題としても取り上げているが、本市の教育施策の一丁目一番地である「大志を抱き未来を拓く人づくり」を着実に実践していかなければならないと考えているところである。

昨年7月の豪雨災害以降、備中松山城も吹屋も観光客数に前年比2割の落ち込みが見られたが、現在はさまざまな要因もあり、V字回復している状況である。災害からの復興の中では、文化財や観光施設等、本市が持つ歴史文化遺産をしっかりと守り活用していくことも求められるところであると思っている。全国的にはまだまだ知名度は低く、さまざまなチャンネルを通じて高梁市を発信していくことで、多くの人に訪れていただき、地域の活性化や経済効果に繋げていきたい。

外国との交流としては、今夏、国際姉妹都市のアメリカ・トロイ市へ中学生11人を派遣する。また、5月にはフランス・リヨン市のアンペール高校から8人が来高し、市内高校生との交流活動等を行った。今後に向けたよい交流が始められたのではないかと感じている。

将来、子どもたちには高梁市に住んで働いてほしいとの願いはあるが、どこに行ったとしても自分が育ったまちを誇りに思ってもらえるような人づくりができたのであれば、それも一つの形ではないかと思っているところでもある。地元で頑張ってくれること、全国で高梁市を広めてくれること、いずれも大切なことであり、人づくりに向けた取り組みに対し、引き続きご支援をお願いする。

3 協議題

| | |
|--------|--|
| 学校教育課長 | 別紙資料により「(1) 子どもたちが志をもつためのカリキュラムについて」を説明 |
| 市長 | さまざまな見解があるとは思いますが、自分としては「夢」と「志」は異なるものと思っている。「こういうものになりたい」というのが夢であって、「これになって、こういうことをしたい」というのが志であると解釈している。 |

| | |
|--------|--|
| 川上教育委員 | <p>新しい取り組みで「高梁大好きの子どもを育てるために」として、ふるさと学習の充実、図書館を使った調べるコンクールが挙げられているが、これらは学校独自でカリキュラムを作成するのか、教育委員会主導として学校に対してはある程度の助言を行っていくのか。</p> |
| 学校教育課長 | <p>一貫教育全体構想図の中でも示しているが、就学前から高校まで共通して、各学校で必ず実施してもらう項目の一つとして、ふるさと学習を位置付けている。</p> |
| 川上教育委員 | <p>例えば中学1年生は職業調べ、2年生は職場体験や立志式といった具体的なものではなく、学校には単にスローガンとして、ふるさと学習を位置付けてもらうということか。</p> |
| 学校教育課長 | <p>各学校、各地域の実情があるので、教育委員会から学校に対して具体的な内容までは指示していないが、各学校の取り組み状況については調査・把握しており、それを踏まえた指導・助言は行っている。</p> |
| 吉川教育委員 | <p>先ほどの「夢」と「志」は異なるという市長の考えと私も同じである。「夢は見つけるものではなくて出会うもの」と言われた人がおり、なるほどと思ったが、それは本物と出会う感動体験である。子どもたちには、そのときにしか経験できない感動体験を積み重ねて行ってほしいし、そのためのカリキュラムであると思う。例えば、大学生がボランティアで小中学生の中に入ってきてくれると、先輩と一緒に活動することで子どもたちの目の輝きが違ってくる。このような小中高大連携の取り組みを、さらに充実させていくべきではないかと思っている。</p> <p>数学者の岡潔は「人間の中心は情緒である、学力ではない」と語っていた。情緒とは人の心の痛みや悲しみが分かることであり、そうしたところに人間の中心がある。現代は点数化される学力ばかりに目が向けられることも多いが、点数化されない情緒力というものを、いかに子どもたちの中に育てていくか。それは、やはり感動体験ではないか。また、落ち着いた学校づくりの一番の基盤となるのも、子どもたちの情緒力づくりを大切にしていくことではないだろうか。</p> <p>第一線で活躍してきた競技選手による「夢先生」の授業は、非常に素晴らしい取り組みであり継続すべきと思うが、子どもたちの目の前にいる担任の先生の存在こそが、本当の意味での「夢先生」であるべきであると思っている。道徳や学級活動の時間等で、失敗や挫折、成功といった自分のこれまでの体験談を子どもたちに直接伝えることが大切なのではないか。また、担任だけでなく、校長も全校朝礼や集会で体験談を子どもたちに語りかけることも大切である。年に1回の「夢先生」の授業に頼るだけではなく、日々の学校生活の取り組みの中で、子どもたちに多くの感動体験をさせて行ってほしい。</p> |
| 藤井教育委員 | <p>「郷土の偉人に学ぶ」ということに関して、昔の人について学ぶことも大切ではあるが、日本や世界で現在活躍されている郷土出身者の生の声を聞くということも、子どもたちにとって非常に感動が大きいと思う。可能であれば、そうした機会を増やして行ってほしい。インターンシップにしても、高梁地域の中だけでは職種も限られるため、子どもたちが将来の姿を思い描こう、目標設定をしようとしても想像の範囲も限られてくる。そうした点を補うことができるプログラムになればよいと思っている。</p> |
| 市長 | <p>ご意見を踏まえ、何ができるか検討したい。自分としては、中学校で立志式を実施してほしいとは思っているが、必ず実施するよう依頼することは難しいか。</p> |

| | |
|----------------------------|---|
| 教育長 | <p>各学校の教育課程については、以前は教育委員会が承認していたが、現在は教育委員会への報告に変わっている。これは、各学校の主体性や実情に応じて柔軟に取り組みができるよう学校の裁量権を広めたという背景があり、教育委員会から指導・助言は行うが、できる限り学校の主体性に任せるという傾向にはある。ただし、教育委員会から学校に対しての呼びかけは可能であるし、このふるさと学習についても呼びかけの一つである。</p> |
| 吉川教育委員 | <p>先ほどの藤井教育委員のご意見にあった、活躍中の郷土出身者の話を子どもたちが聞くというのはよいことであると思う。この度、著名なマットペインターとしてアメリカで活躍している吹屋出身の谷雅彦さんが2年ぶりに帰国ということで、中学生や高校生を対象とした講演会の企画が進んでいると聞いている。郷土出身の著名人を、例えば「備中高梁伝えたいし」に任命するのも一つの方法であるとは思いますが、そうした人たちの話を直接聞くことができる場を設ける。これも、子どもたちにとっては、一つの「夢先生」となるのではないだろうか。</p> |
| 市長 | <p>皆様のご意見からは、やはり「心を育てる」ということに尽きるのだろう。そのような視点を大切に、高梁市の子どもたちを育て、将来は世界に羽ばたいてもらってもよいのではないかとも思う。</p> |
| 学校教育課長 | <p>別紙資料により「(2) 特別支援教育について」を説明</p> |
| 市長 | <p>以前も説明させていただいたが、本人が認知しているか否かは別として、市内で何らかの支援が必要な子どもの割合が約50%と非常に高くなっている。やはり、就学前の段階でしっかりとケアし支援していくことが大切で、さらには小学校、中学校へと確実に繋いでいく必要がある。就学前から途切れることなく連携し対応していくことで、大人になってからの本人の活動の幅といったものも変わってくると思っている。現在、8050問題が大きく取り上げられているが、そのような問題を発生させないためにも、早い段階からの支援が必要である。</p> |
| 吉川教育委員 学校教育課長 渡邊教育委員 | <p>特別支援教育推進センターについては、まだ設置場所等の具体的な内容は決まっていないが、市街地の認定こども園整備を進めていく中で、支援を必要とする子どもたちへの対応も必要ではないかという議論もあり、本市に必要なのは何かも含め、全般での検討を進めるよう担当課へも指示しているところである。</p> <p>学校と連携している主な関係機関は、「color」や「つむぎ」になるか。そうである。就学前では、約20%の子どもを支援してもらっている。</p> <p>自分の子育て経験からお話しすると、就学前にこのような支援組織の施設を利用する機会があったことで、小学校に上がる際に、子どもの状況というものがいわゆるその子の取扱説明書として、小学校の先生にきちんと伝わるというメリットがあった。子育て経験が浅く、困り感を抱き悩んでいる保護者の中には、こうした場を利用することも方法の一つであるということを知らない人もまだまだ多いと思うので、今後、センターが設置されるということは心強いことである。</p> <p>就学前から大人になるまで支援体制が連携していくことで、先ほど市長のお話にもあった8050問題のように、家庭の中だけで抱え込んでしまうといったことは少なくなるのではないかと思う。高梁市での取り組みが、日本のモデルケースになるように進めていかなければならない。</p> |

| | |
|--------|--|
| 市長 | <p>渡邊教育委員が取扱説明書に例えられたが、一人ひとりの非常に高度な情報であると思う。現場の先生たちも含めて、その情報を関係者みんなで共有することが何よりも大切である。</p> |
| 教育長 | <p>個別の教育支援計画については、現在、高梁市では高校までは持ち上がるようになっている。ただし、様式が異なるといった課題もあったので、それは統一しようとしている。</p> <p>支援計画には、子どもに将来どのようになってほしいか、保護者や担任が記載するようになっているが、元気で明るく育てほしい、人に迷惑をかけないでほしいといった内容に留まるだけでなく、例えば企業に就職させたいといった、より具体的な目標まで保護者や学校でしっかりと話し合い決めておくことで、その実現のためにこの段階ではこれだけのことをしておかなければならないという支援体制も明確になり、みんなが安心して目標に向かって取り組んでいけると思う。そのような取り組みを目指し、学校に対しては指導・助言も行っている。</p> |
| 川上教育委員 | <p>徳島県の取り組みで興味深いものがあり、発達障害者のための総合的な支援拠点として、一つのゾーンの中に乳児院、高等学園、療育センター、支援センターが設置され、各施設が連携した支援を実施している例がある。アセスメントチェックシートを上手く活用しながら、乳児から高校まで、将来を見通しての連携が図られており、そのような高梁市版の取り組みができればよいと思っている。</p> <p>高梁市で取り組みを進めていく上で、県総合教育センターのアセスメントパックは効果的に働くのではないかと考えている。現在、市内の小・中学校で活用している学校は少なく、市全体で活用する方向で研修でも上手く取り入れ、今後、支援センターとも連携していけば、よい実践になるのではないだろうか。</p> |
| 市長 | <p>統計上の話にはなるが、現在、日本では働き手が非常に不足している状況で、障害のある人が就労できる環境をもっときちんと整えることができれば、働き手不足は約3割改善するとも言われている。だからこそ、社会に出る将来に向けての支援が、就学前から継続して行われる必要があるのだと思う。</p> |
| 学校教育課長 | <p>別紙資料により「(3)部活動の在り方に関する方針について」を説明</p> |
| 渡邊教育委員 | <p>成羽中学校では、備中中学校との統合後は生徒の通学時間の課題もあり、部活動の朝練がなくなった。練習量に比例して結果も表れてくるものなので、当初、子どもたちのモチベーションが低下しそうになったとも聞いている。子どもたちの練習したい気持ちも汲みつつ、バランスを取る難しさを感じたことがある。</p> |
| 教育長 | <p>自分も学校統合後が気になり、試合結果も確認したが、統合前よりもよい成績を出していることもあった。顧問にも話を聞いてみたが、朝練がなくなったことの影響はそれほどないということであった。部活動の練習時間が少なくなった分、顧問や生徒が効率的に練習に取り組むようになったことも考えられる。</p> |
| 吉川教育委員 | <p>現状として、文化部活動の新設は難しいことは十分理解できる。一方で、子どもたちのアンケートの結果では、吹奏楽の希望が多い。あくまで希望ではあるが、市内の3高校にはそれぞれブラスバンド部があるので、高校との何らかの連携の中で、中学生が生演奏を聞いたり、実際に楽器に触れたりする機会を作っていくことはできないだろうか。</p> |

| | |
|----------|--|
| 藤井教育委員 | 生徒数が減少する中、例えば小中一貫校では、中学校の部活動に小学校高学年が参加している例もあるので、高梁市でも小学校高学年と一緒に参加できるような方法を検討してみてもよいのではないかな。 |
| 市長 | そのようなことは可能であるのか。 |
| 教育長 | 制度としてできないことはないとは思いますが、実現にはクリアしなければならない課題は多いと思う。 |
| 藤井教育委員 | 高梁市としてのスポーツの強化種目を設けて、支援制度を作ることはできないか。その強化スポーツが全国的に有名になれば、十分まちのアピールになるし、以前も意見させてもらったことがあるが、子どもからプロまでのスポーツ導線ができれば、その関係での移住・定住者の増加も期待できると思う。 |
| 市長 | 自分も、そうした取り組みは一つの方法であるとは思っている。何かの取り組みができればよいのだが、また皆さんからもご提案をいただきたい。 |
| スポーツ振興課長 | 別紙資料により「(4) スポーツ推進計画について」を説明 |
| 渡邊教育委員 | 生涯スポーツについて、大人であれば自力で開催場所まで通うことは大概可能であるが、小学生等の小さい子どもがスポーツ活動を始めようとする保護者の送迎が必要になってくる。共働き世帯が増加する中では、送迎が難しい家庭も多いと思う。子どもが何かスポーツをしたいと思ったときに、そこへ行くまでの手段がいろいろとあればとも感じている。例えば、総社市で運行されている新生活交通「雪舟くん」のような移動手段があれば、市民の皆さんの習いごとの選択肢も増えるのではないだろうか。 |
| 市長 | 市民の移動手段については、スポーツ活動に限らず、大きな課題である。 |
| 渡邊教育委員 | スポーツの環境だけ整えても、特に高梁市はエリアが広いので、そこへ行くまでの移動手段というものも併せて考えておかなければ、皆さんが安心してスポーツしようという気持ちにまで至らないかもしれない。 |
| 市長 | 市民の生活交通に関しては、全国の参考事例の情報を収集しているところである。例えば京丹後市の上限200円バスの取り組みは興味深く、利用者が増え、市の財政負担は増加しなかったという例もある。いろいろと研究していきたい。 |
| 吉川教育委員 | 吉備国際大学のフィットネススタジオの健康スポーツ教室に通って3年目になるが、週1回2時間、14回5,000円という格安の価格で利用できるのも、健康維持のためにも大変ありがたいと思っている。大学との連携も図りながら、このような地域資源をさらに活用していく方法を探っていってほしい。 |
| 教育長 | 最近あまり通うことができていないが、私自身も利用している。指導の学生たちも最初は慣れていないが、回を重ねるうちに成長が見て取れる。 |
| 川上教育委員 | 学生にとっても、市民の皆さんへの指導に携わることによって、卒業研究に係るデータ収集や、インストラクターとしてのノウハウを身に付けたりと相乗効果がある。市民も皆さんには、ぜひ積極的に活用いただきたいと思っている。 |
| 吉川教育委員 | スポーツ教室に参加してよかったと思うことが、ストレッチ、ゆる体操といったものを基本から教えてもらったことである。ストレッチを毎朝5分続けているだけでも効果を実感している。自分だけではよく分からないことも多く、指導してもらったことが大変勉強になった。 |

| | |
|------------|--|
| 文化センター所長代理 | 別紙資料により「(5) 文化センターの指定管理者制度の導入について」を説明 |
| 市長 | 文化センターの指定管理者制度導入については、昨年度当初は総合文化会館単独での導入の方針であったが、2カ所の先進地視察も踏まえて、指定管理の範囲等を再検討しているところである。基本的には貸館業務に関係する範囲となることは考えているが、総合文化会館には清水比庵記念室、文化交流館には歴史美術館があり、こうした学芸員を必要とする部分をどうするのかという課題もある。 |
| 渡邊教育委員 | 現在、イベント等で総合文化会館の大ホールを使用する際に舞台操作を担当している人たちはどのような位置付けとなっているのか。 |
| 市長 | 舞台操作業務を委託している。 |
| 渡邊教育委員 | 指定管理者制度を導入することによって、何が変わってくるのか。 |
| 市長 | 維持管理や警備等、施設の管理全てを任せるようになる。管理の全てを任せるということであるので、条例事項を超えない範囲で、指定管理者の自主的な運営を行うことができ、運営で収益を上げてもらうことも可能である。 |
| 川上教育委員 | 先進地視察からの考察として4点挙げられていたが、事務局としてどのように考え、高梁市にどのように取り入れられようとしているのか、もう少し詳しく聞かせてほしい。また、指定管理の範囲の再検討案として3パターンを示されていたが、それぞれのよい点や課題となる点についても詳しく示してもらえると、どのような形での導入がよりよいのか我々も検討しやすい。 |
| 文化センター所長代理 | <p>考察の立地条件、人口規模については、高梁市での状況が変わるものではないので、複数施設の管理、貸館数に関して補足説明させていただく。</p> <p>視察した津山市の音楽文化ホール・ベルフォーレ津山も倉敷市の玉島市民文化センターも、その施設単独ではなく複数施設を一体的に管理しており、そうしたスケールメリットという点を考えた場合には、高梁市においても当初方針の総合文化会館単独という検討だけではなく、文化交流館も加えての両施設での運営についても検討の必要があるのではないかと考えたものである。</p> |
| 川上教育委員 | 参考として、視察先の人口規模や立地条件等も具体的に教えてほしい。 |
| 文化センター所長代理 | <p>平成30年10月1日現在で、津山市の人口が約10万1,000人、約3万人の高梁市の約3倍である。倉敷市が約47万6千人、玉島地区に限定すると約6万4,000人で高梁市の約1.5倍となっている。高齢化率についても調べたが、津山市が30.3%で、27市町村中23位である。玉島地区の高齢化率は29.4%、倉敷市全体として順位であるが25位となっており、いずれの市も若い人が多い地域であるといえる。</p> <p>立地条件であるが、ベルフォーレ津山はJR津山駅から徒歩5分圏内、玉島市民交流センターはJR新倉敷駅から車で5分圏内となっており、人口の多さや利便性のよさから、いずれの施設も利用者が多いと聞いている。</p> <p>複数施設の管理について、ベルフォーレ津山は、第三セクターということもあるが、同じ建物内にある百貨店、図書館等も併せて管理している。玉島市民交流センターでは、同一敷地内にある阿賀崎公園、玉島武道館と一緒に指定管理となっている。</p> |

| | |
|------------|---|
| 市長 | <p>貸館数について、ベルフォーレ津山は、音楽に特化した施設であるため、リハーサル室や楽屋が貸館となっている。玉島市民交流センターは、ホールのほか、和室会議室3室、会議室6室と非常に多くの会議室が設けられており、さらに音楽室2室、多目的室、工作室、陶芸窯室、調理室等もある。一緒に管理している体育棟の方でも、テニス、バレーボール、インディアカ、バドミントン、バスケットボール、ソフトバレー、バウンドテニスといったさまざまなコートが取れるということで、非常に多くの貸館がされている施設であった。</p> <p>指定管理の範囲の再検討の3案について、一つは、昨年度の方針であった総合文化会館のみの貸館、施設管理、舞台操作業務を指定管理とする案をそのまま挙げているものである。次に、先進地視察により、高梁市においても総合文化会館と文化交流館の共通部分を一括管理の方が合理的ではないかということも考えた結果、両館に共通する貸館、施設管理、舞台操作、自主文化事業の4部門を一緒に管理していく案である。最後が、学芸員を必要とする部分も含めて両施設の全てを管理していく案であるが、この場合、指定管理者には学芸員の雇用についても考えてもらう必要が出てくる。</p> <p>ベルフォーレ津山も、玉島市民交流センターも、市の一般財源は投入している。指定管理委託料として基本的な部分は負担するが、それ以上の部分は指定管理者の運営によって収益を上げるなり努力してもらうということである。</p> |
| 文化センター所長代理 | <p>高梁市の場合の一般財源は、総合文化会館、文化交流館の両施設を合わせた平成29年度決算額が約1億3,000万円となっている。市債も入っているが、この決算額は実施事業も含めての金額ということか。</p> |
| 市長 | <p>事業も含めての全体として金額である。市債は施設修繕に充てたものである。経常的な経費であれば、もっと低い金額にはなる。</p> |
| 川上教育委員 | <p>先進地視察をする場合、通常、そこへ行く目的が何かあると思う。今回の2施設を選んだ理由は何か教えてほしい。</p> |
| 文化センター所長代理 | <p>視察先の選定に当たり、文化施設の団体に相談したところ、運営が上手くいっている施設として紹介いただいたものである。</p> |
| 市長 | <p>市の規模ということでは全く異なるが、指定管理のノウハウを学ぶという意味では参考となる施設であったのではないかとは思ふ。</p> <p>現在、整備中の成羽複合施設についても、指定管理制度について検討する必要が出てくる。そうしたことから、今回の文化センターの指定管理者制度については、今後の試金石になるともいえる。もう少し資料も整え、また別の機会にお示ししたい。</p> |

4 その他

| | |
|--------|---|
| 吉川教育委員 | <p>市所有のボンネットバスについて、何とか活用したいという吹屋地区の住民の声は多い。昭和レトロのまちとして売り出している大分県豊後高田市では、土・日曜日、祝日に定期的にボンネットバスを無料運行しており、乗車するガイドの案内も好評で、経費については市が負担していると聞いている。現在、高梁市において災害からの復興が最優先であることは十分理解しているが、一つの要望として、今後、観光協会との連携も図りながら、観光の目玉となるよう、ボンネットバスの活用方法を探ってもらえないものかと思っている。</p> |
|--------|---|

| | |
|--------|--|
| 川上教育委員 | <p>このような時代であるので、情報というものは、いくらでも手に入ると思う。市の限られた財源の中で何か事業を進めていく場合には、情報は幅広く調査して活用すべきとの思いがある。全国には高梁市と同規模の自治体はいくつもあり、また規模の小さい自治体もある中で、それぞれの自治体がまちの活性化を目指し、いろいろと工夫しながら特色ある政策を立案していると思う。高梁市においても、狭いエリアに留まらず幅広く調査を行い、相当先を見越して政策を立案していかなければ、さまざまな問題は解決できない。それができるのは市職員の皆さんであり、そうした思いを持って取り組んでほしい。我々も教育政策に関しては多くの情報を得ながら頑張っていくので、皆さんにも幅広い視野を持って取り組んでほしいと思っている。</p> |
| 市長 | <p>貴重なご意見感謝する。</p> <p>吉川教育委員のボンネットバスの活用については、現在の高梁市の財政状況を踏まえ、少し時間をいただきたいという状況である。メーカーであるトヨタからは、エンジンを全て積み替えれば今よりも安定した稼働ができるのではないかという案ももらったが、何とか現状のエンジンや車体のままで動かしたいという思いを持っている。地域の皆さんの思いは十分理解している。</p> <p>また、幅広く情報を収集するという川上教育委員のご意見は、もっともなことである。例えば、先ほどご紹介した京丹後市の200円バスも、一つの手法として参考になる取り組みである。全国にはいろいろな事案があるので、今後も情報収集にはしっかりと取り組んでいきたい。</p> |

5 閉会

あいさつ（市長）

| |
|---|
| <p>本日は、いろいろなご意見をいただき感謝する。</p> <p>先般、「自転車を活用したまちづくり首長連合」に加入させてもらった。自転車というのは、健康やスポーツ等さまざまな側面を持っており、自転車を一つのツールとして、まちづくりについていろいろと考えていこうというものである。このように一つのツールからでも、いろいろと発想することで、多様な取り組みに繋がっていくと思うので、皆さんにもぜひ知恵をお貸しいただきたい。</p> <p>最初に申し上げたとおり、高梁市で育った子どもが大きくなったとき、ふるさとを自慢できるような教育施策を進めていきたいと考えているので、今後ともご支援・ご協力をお願いする。</p> |
|---|